

# 豪雨復旧 支援の要

## 熊本市のNPO

愛媛・宇和島市でボランティアつなぐ

# 「心強い」と被災者

7月の西日本豪雨で被災した愛媛県宇和島市吉田町の玉津地区で、熊本市東区のNPO法人バルビー（中村聖悟代表、15人）が災害ボランティアの要として奮闘している。熊本地震の被災者支援も続けるメンバーが目指すのは、誰もが自分らしく生きていける「回復力のある地域」づくり。人手不足から復旧が遅れる被災地で、被災者の困りごとを目を凝らし、共に汗を流している。



支援活動中のボランティア（左）と言葉を交わす、左からNPO法人バルビーの中村聖悟代表、渡辺康人さん、木下将詞さん＝17日、愛媛県宇和島市吉田町の玉津サテライト



床下の泥を出す作業に当たる災害ボランティア＝18日、愛媛県宇和島市吉田町



愛媛・ミカン発祥の地といわれる吉田町。入り江を囲む玉津地区も海に迫る山々にミカン畑が広がる。豪雨はその緑を痛々しく傷つ

「最初の1カ月は農道や水路の土砂撤去が担っている。」

作業に訪れたボランティア9人に頭を下げた。9人は、玉津自治会などが開設したボランティア拠点「玉津サテライト」の仲介で派遣された。被災者とボランティアをつなぐサテライトの運営は、今月1日からバルビーが

け、大量の土砂が各集落に流れ込んだ。「暑い中、お世話になります」。法津集落のミカン農家、赤松政紀さん（45）は18日朝、自宅床下の泥出し

2014年発足のバルビーは、障害者やLGBT（性的少数者）などあらゆる人を尊重し、多様性を認める社会づくりを掲げる。熊本地震では国際NGOの緊急支援に協力、現地では災害支援に力を入れている。社会福祉士や看護師、理学療法士、保育士、デザイナーなど顔触れも多彩だ。「被災者一人一人の個性を大切にしたい」

と中村代表（45）。熊本下は「泥は手付かずという所が少なくない」と木下さん。被災しながらも「もっと大変な人もいるから」と支援を速慮する気風もあり、潜在化する「被災者の困りごと」を懸念する。

津サテライトで、支援ニーズの掘り起こしに努めている。1日から常駐を続けるメンバー、木下将詞さん（32）は入り組んだ路地を歩き、支援活動の進み具合などを確認。宇和島市社会福祉協議会や災害支援にたけた団体と連携を取った必要数のボランティアを調整している。

玉津自治会の東山武良会長（41）は「初めて大災害を経験し、ボランティアの受け入れ方も分からない中、バルビーのみなさんの助言や支援は心強い」と話している。（小多崇）

高齡世帯が多く「床

ただ、バルビーの存在が浸透してきたことで、寄せられる情報や相談は徐々に増えてきたという。

玉津自治会の東山武良会長（41）は「初めて大災害を経験し、ボランティアの受け入れ方も分からない中、バルビーのみなさんの助言や支援は心強い」と話している。

玉津自治会の東山武良会長（41）は「初めて大災害を経験し、ボランティアの受け入れ方も分からない中、バルビーのみなさんの助言や支援は心強い」と話している。（小多崇）

玉津自治会の東山武良会長（41）は「初めて大災害を経験し、ボランティアの受け入れ方も分からない中、バルビーのみなさんの助言や支援は心強い」と話している。

玉津自治会の東山武良会長（41）は「初めて大災害を経験し、ボランティアの受け入れ方も分からない中、バルビーのみなさんの助言や支援は心強い」と話している。

